



episode 36 わが家の大事件を記憶している愛おしい絵本

投稿者 タナカ サトコ さま(長野県)

今、我が家にあるその絵本は、とにかく見た目が衝撃的なのだ。
本の右下が、たて15cm、横4cmほどにわたって焼失してしまっている。原因は、実家の掘りごたつだ。
数年前、子供たちを連れて実家に遊びに行った時に見つけ、あまりの懐かしさに引き取ってきた。
子供たちは「なにこれ、どうしたの?」と驚いたが、私は30年以上も前のことが一瞬でよみがえってきた。

今は底面をふさいでしまったが、私が幼いころ、実家の掘りごたつは、練炭のおきを使う本格的なものだった。
だから冬の間は、油断して深く入り込むと、靴下が灰だらけになったりしてしまうのだ。
テレビと掘りごたつのある居間は、いつでも家の中心だった。絵本を読むのも、もちろんここが一番だった。

その日、誰かがごたつに入るか出るかして、ごたつ布団をめくったのだろう。
白い煙がもうもうと部屋中に充満したのだ。
大人たちが、大あわてで懐中電灯や火ばさみを持ち寄って、灰の中に落ちていた絵本を救出した。
我が家はそのころ、私と妹、両親、祖父母、そして曾祖母の7人家族だった。
その時のことは、ぼんやりとだが覚えている。
焼けたのが紙の本だったせいか、嫌なおいじゃないなと思ったことさえ思い出した。
幸いすぐに気づいたので、大事にならずにすんだ。

焼失した部分が、絵にも文章にもほとんど支障のない箇所だったのも奇跡的だった。
それを見て、もったいない精神の私の母親が、処分せずに残しておいてくれたのもありがたかった。
しかも残ったページの端々が、ある意味、芸術的なのだ。
かこ先生の描く、虫歯になってしまった歯のイラストと、色の具合がよく似ている。
見ようによっては、前衛的な仕掛け絵本のようにも思える。



『はははのはなし』
加古里子 文・絵
福音館書店 1972年

今は、両親がふたりだけで暮らす実家のかつての大事件を、この絵本が覚えていてくれている。
それを今は私が、自分の子どもに読んであげられるなんて、あの時、家族の誰も想像できなかった未来だ。
見るたびに、なんだか笑ってしまうのだが、今もとてもとても愛おしい絵本なのだ。

『絵本の日アワード in FUKUOKA 2021』投稿作品より



本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。
さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本のある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



科学絵本の生みの親は、この絵本作家！

「ははは はっはっはっはっは」

元気な笑い声と、大笑いしている子どもたちの楽しそうな姿にはじまるこの絵本は、一見、ユーモア絵本や物語絵本と勘違いしそうですが、紛れもなく科学絵本なのです。作者は、『からすのパンやさん』や『だるまちゃん と てんぐちゃん』などの創作絵本で大人気の、かこさとし氏です。

わくわくする創作絵本が代表作のかこ氏には、戦後日本における科学絵本の創始者という功績があります。1959年のデビュー作『だむのおじさんたち』（福音館書店）は、日本において科学絵本が誕生し、その歴史が切り拓かれた歴史的史料でもあるのです。

かこ氏は、60年におよぶ作家人生で600冊以上もの著作を「子どもたちのため」に制作しました。物語や遊び、科学や歴史など、子どもたちが生きていくうえで触れ合うあらゆるものが題材です。全国各地の現場取材と、莫大な文献に目を通し情報収集を重ね、少しでも有益な知識を子どもたちに届けたい、そして楽しんでもらいたいという思いが、すべての作品に詰まっています。その著作物の半数近くが科学絵本なのです。



科学者がつくる、本格子ども向け科学絵本

『はははのはなし』は、福音館書店の月刊誌「かがくのとも」1970年6月号で発表されました。「かがくのとも」は世界初の月刊科学絵本で、戦後日本の科学絵本の歴史に大きな役割を果たしています。雑誌発表の2年後にハードカバーとなった『はははのはなし』は、昭和から平成、令和と、実に55年もの歳月を越えて読み継がれている歯の科学絵本というわけです。

かこ氏は絵本作家である前に、科学者でもあります。大学1年のときに敗戦となり、死にはぐれた自己と心の葛藤に突き当たります。そんなとき、大学の演劇研究会で目にした小学生の反応に衝撃を受け、子どもの心をつかむ術を学びたいと、児童文化

研究の道を歩きはじめます。

大学卒業後は、会社に勤務しながら、セツルメント活動に従事して子どもの行動記録をつけたり、紙芝居を製作し上演したりしました。本業では36歳で工学博士、40歳で技術士(化学)を取得しますが、47歳のとき退社します。そうして、本業「絵本作家」かこさとしが誕生するのです。



かこさとし氏は、歯に造詣があったのです

科学者である絵本作家“かこさとし”だからこそ、科学絵本を数多く制作できるのです。工学が専門分野のかこ氏が、歯の科学絵本を制作したのにも、必然的な理由があります。それは、幼少期と、セツルメント活動2つの体験に起因しています。

子どものころ、12歳年上の実兄が歯科医師になるのです。小学生のかこ少年は、兄が開業した歯科医院の玄関番となったのでした。中学生になってからは、兄の見まねで金歯や人形をつくっては、溶かして戻していると、金が減って怒られる体験を重ねています。加えて、歯の機関誌を読み、興味を深めた経験も持ちあわせているのです。

やがて社会人となり、川崎の子ども会を手伝うようになって、子どものむし歯の多さを目の当たりにします。当時で、一人平均9本のむし歯があり、乳児だから20本の約半分は保護者の問題と気づき、昔の知識を総動員して描いたのが本作なのです。既にお兄さんはなくなっていたので、大学歯学部教授に専門家の立場から助言してもらったことが、奥付に記されています。

今年2026年は、かこさとし氏生誕100年です。令和に読んでも全く色あせないかこ氏の作品に、たくさん触れて感じて、視野を広げてください。

文献

- 1) 月刊MOE編集部：かこさとし『はははのはなし』, 月刊MOE 37(11), pp.20-23, 2015.
- 2) 福音館書店編集部：月刊科学絵本「かがくのとも」の50年, 東京, 福音館書店, pp.114-116, 2019.